

リフォーム

有森 信二

いったん身ぐるみ剥がれ
新しい装いに生まれ変わろうとしている

これならいっそ建て替えるの方が
よいのではないか
というのは老人の考えらしく

コンクリートを削り
チェーンソーが唸る
立て替えに近いリフォームだ
空き家になって一年の
百坪の広さ

ようやく買い手がついたのだ

若い夫婦らしいから
シックな佇まいだった家は
お気に召さないらしい
屋根から
玄関から
居間から全部が

学校に入ったばかりの子供のほかに
生まれたばかりの子供もいますから
と羞じらいながら夫婦はいった
子供たちの砂場や
ブランコなども
ちゃんと頭に絵描かれているのだろうか

ピアノが奏でられ
元気にランドセルが出入りし
居間を駆けまわる

青いシートの中で進められている工事が
予定の二か月後に終われば

どんな奇抜な玄関が現れ
どんなしゃれた色調の建物に
変貌するのだろうか

いなかもん
田舎者

過ぎた日は振り返らない

ただ前進あるのみと考えてきたが

我が来た道はこれでよかったのだろうか

ときどき思い出したりするのは

歳のせいだろうか

過去は過去

すべてはこれからはじまる

という考えに立とうとしているのに

口惜しく過ぎたことが

数珠つなぎに浮かんでくる

はつきり言えるのは

枯れてきたりするなんて

そんなバカなことなぞ

ありはしないということだ

これからだ

まだこれからなんだと

口惜しまぎれに

呪文よろしく呟き聞かせる

とはいえ

我が来た道はこれでよかったのか

という思いに支配される

振り返っているという

ほどに淡々としたものではないし

口惜しさに地団駄踏んで

いるというほどでもないが

やはり振り返っているのだ

あれも間違いだった

これもとどのつまり失敗だった

間抜け野郎のとんち野郎めと

言い出せばきりがない

なんでこんなに女々しいんだ

どうしてこう喧嘩っ早いんだ

あときは

きつとホトケ気取りだったんだ

とか

気障な台詞で決めてやろうなんぞとか

愚にもつかぬ

下手な芝居なぞ似合わないのだ

田舎者には

すべてはこれからだけど

過ぎて行った口惜し過ぎることは

唐変木なりに

嘆かわしいのだ

事実は事実

結果は結果として

丸ごと引き連れ

からっぽのままに

行くよりほかないのだろう

田舎者には

贅 沢

いりこ

トマト

枝豆

キュウリ

クログオマ

椀半分の飯

文庫本

一時間の昼寝

自分の居間

譲り受けた

子供用の机と椅子

旧式のパソコン

井戸水

モミジ二本の庭

自分の手足

北風

北風が吹いている

ビルの隙間に吹いている
街灯の下にも吹いている

北風が吹いている

屋根の上に吹いている

小さな明かり一つ点けた
屋根の上にも吹いている

北風が吹いている

公園の埃を巻き上げ

音たてて吹いている

ベンチの影に吹いている

トイレの裏に棲み着いた

人たちの上にも吹いている

北風が吹いている

海の方から吹いている
人影の消えてしまった
瓦礫の上に吹いている

北風が吹いている

犬たちの毛を逆立たせ

真向こうから吹いている

犬たちは低く鳴き

遠く鳴き

人影の消えてしまった

村への道を

いつか

知らず

かえっていく